

巻 頭 言

大阪医科大学看護学部 教授 林 優子

Yuko Hayashi

平成29年3月末で看護学研究科看護学専攻博士後期課程の完成年度が終了します。これで、本学における学士課程、修士課程および博士課程の一貫した看護学教育体制が自立できることとなります。今後は、未来が期待する教育的展開を思考しつつ、本学独自の看護学教育が進化し続けることを期待したいと思います。大学の教員には、教育研究を行い、その成果を広く社会に提供するという社会貢献の使命があります。教育や実践の質向上に向けて、看護研究の成果を教育の場や看護実践の場に積極的に発信する力が問われているのです。本学部では、教員たちの看護研究の成果を学内外に発信するために、看護学部設置の年度に大阪医科大学看護研究雑誌第1巻を発刊させました。その研究雑誌は今回で第7巻となります。第6巻からは大学院生の論文も掲載されるようになり、これまでに掲載された論文数は100編となりました。その内訳は、総説3編、原著14編、研究報告32編、実践報告5編、資料44編、特別寄稿2編です。

さて、話は変わりますが、世界には研究成果の功績を評する数々の賞が存在します。そのなかでも世界最高の栄誉である賞といえば誰しもが絶賛するノーベル賞です。2016年は、東京工業大学大隅良典栄誉教授が「細胞が不要になったたんぱく質などを分解するオートファジーと呼ばれる仕組みの解明」でノーベル医学・生理学賞を受賞されました。細胞がどうやって組織を再利用し、病気を防ぐのかという長年の疑問を解き明かすための突破口になったとのことですが、実に28年間、一貫して細胞の「自食作用（オートファジー）」という現象を探究されたことが報じられていました。大隅栄誉教授は若手研究者に、「サイエンスは、どこに向かっているのかわからないところが楽しいのです。チャレンジすることが科学の精神なのです」と述べています。研究者の心に響くメッセージです。一つのテーマを探究し続ける粘り強さは、そのような研究者としての自らの哲学が原動力となっているのでしょう。

一方で、ノーベル賞とは異なる独創的でユーモラスな研究に贈られるイグノーベル賞というのがあります。その賞の理念は、「人々を笑わせ、そして考えさせてくれる研究」ということであり、一般の人々に科学の面白さを伝えたいという狙いもあるそうです。毎年オリジナリティーあふれる受賞者たちが勢揃いしています。イグノーベル賞受賞後に、ノーベル賞を受賞された科学者や、副業としていた研究がイグノーベル賞受賞につながったという日本人科学者もいます。日本人は10年連続受賞しています。日本にも奇抜なユーモアあふれる研究者がいるのだと日本人を誇らしく思いたくなる賞です。2016年イグノーベル賞の日本人受賞者は、「股のぞき効果」で知覚賞を受賞した立命館大学東山篤規教授と大阪大学足立浩平教授です。姿勢によって視覚の変化が体感的に知られていたことを、

「股のぞき」でその仕組みを解明した研究です。イグノーベル賞受賞者の研究は、テーマを見るだけで爆笑したくなります。とにかく発想が愉快で尋常ではありません。その発想がノーベル賞とは異なる凄さなのです。イグノーベル賞受賞者たちの研究は、学生に研究の楽しさや面白さを伝えるヒントになるかもしれません。